

フィリピンの糖業について

水 村 勝 彌

1. はじめに

フィリピンは1975年に288万tの分蜜糖を生産しているが、これは甘蔗糖だけで見るならば、世界総生産量の5.7%を占め、第7位にランクされる量である。

この甘蔗糖は同国の典型的な輸出産業の一つで、ココナッツ・木材・銅などと並んで、常に十大輸出品目の上位を占めており、多額の外貨を稼いでいるのみならず、糖業で生計を営む者200万人ともいわれ、肥料・機械等の関連産業を含めて考えれば、その雇用吸収力は極めて大きく、同国経済を支える基幹産業の一つとなっている。

従って政府としても一貫して生産拡大政策をとって来たが、1974年末の国際糖価暴騰について起った糖価暴落と現在に至る価格低迷等により、大きな打撃を受けている。

そこで、フィリピン糖業の現状と問題点とをさぐって見たいと思う。

2. フィリピン糖業のあゆみ

さとうきび（学名 *Saccharum officinarum*）の原産地はニューギニアであるといわれている。⁽¹⁾

これがセレベスを経由して、東南アジア諸国から、更に西の熱帯・亜熱帯地域にひろがったと考えられている。またフィリピンにさとうきびがもたらされたのは紀元前4000～2000年の間のことで、ミンダナオにセレベスからの移住者がもたらしたといわれるが、それはともあれ、1521年にマゼランが上陸した時には、すでに各地で原住民の手によって栽培されていた。

1572年にスペイン人がマニラに至り、ここを首府と定めて以降、マニラ周辺のブラカン、パンパンガ、ラグーナなどの地方で栽培がすすみ、ヴィサヤ諸島でも、これと歩調をあわせてさかんに栽培されるようになった。

17世紀初頭に中国技術が導入されることによって、フィリピンの砂糖産業は大きく発展し、1755年には、中国その他アジア諸国への輸出が行なわれ、1789年には2,500～3,200tの輸出が記録されるに至った。

また1796年には約350tの砂糖が米国に向けてはじめて輸出されたが、この時以来19世紀末にかけてフィリピンは総輸出量の60%を米国に輸出するようになったのみならず、1902年に米国の植民地となって以来、ますます米国への依存度を高めてきた。

このような中で、米国が自国の国内生産者保護の為に制定した1934年の砂糖割当法により

年間90万tの割当てを受けて輸出をしてきたが、第二次世界大戦後も、1946年のベル通商法とこれを受けた1954年のラウレル・ラングレー協定（L-L協定）にひきつがれ、特惠待遇で米国に輸出をしてきた。また、1960年に起った米国とキューバの断交はフィリピンに有利にはたらし、更に対米輸出を増加させ1965年以後年間112万tを固定的に割当てられてきたのであるが、1974年7月（実質的には1975年7月）にL-L協定が失効し、ほぼ同時に起った国際糖価の大暴落と相まって、フィリピン糖業は大きな打撃を受け、就中生産者は苦境に立たされている。

3. 製糖工場

第二次世界大戦前に操業していた46の製糖工場は戦争により壊滅状態となり、終戦の年の操業工場数は僅か5工場となってしまったが、その後160億ドルに及ぶ日本の賠償金や米国の援助により、遅々たる歩み乍らも恢復に向い、1952年に25工場が操業できるようになったが、それが1960年以後急速に恢復し、1977年9月現在38工場（ルソン10、パナイ6、西ネグロス15、東ヴィサヤ6、ミンダナオ1）が1日当り16.6万tの圧搾能力をもって、年間平均246日稼働で操業している。

なお18工場の新設計画があり、うち2工場が建設中である。

4. 最近10年間の動向

① 生産と輸出及び在庫

表1 分蜜糖生産量・輸出量・在庫量 単位 1,000Mt

年 度	生産量	輸出量	期末在庫
65/66	1,402	1,076	130
70/71	2,056	1,444	337
73/74	2,446	1,587	703
74/75	2,394	1,065	1,130
75/76	2,875	1,219	1,312

APO提供 フィリピン砂糖協会資料より

表1に見られる如く、75/76年度の生産量は、65/66年度のそれに比べて2倍強と大巾に増加しているが、74/75年度以降は米国市場への輸出減、世界的な生産増と消費減の影響受け、更に75/76年度には対前年比20.1%の生産増もあって、在庫量が急増し10年前

の約10倍もの在庫を抱えるに至った。またこの在庫量は同年の生産量の45.6%に当り、フィリピン糖業にとって大きな重荷となっている

生産額と輸出額の動向は表2に見られる通りであるが、輸出額においては、特に75/76年

表2 分蜜糖生産額・輸出額

年 度	生 産 額 百万ペソ	農業生産額中 に占める割合	輸 出 額 百万ドル	輸出総額中 に占める割合	トン当り輸 出額 ドル
65/66	400	11.6	142.37	18.5	13231
70/71	1,180	13.7	222.29	20.9	15394
73/74	3,252	22.8	693.83	36.8	43720
74/75	3,419	18.0	646.79	23.7	60732
75/76	3,188	15.8	382.87	16.7	31409

APO提供 フィリピン砂糖協会資料より

度の国際糖価暴落の影響を強く受け、輸出量は対前年比14.5%の増加を見た(表1)にもかかわらず、トン当り輸出単価が前年の51.7%とほぼ半額に落ち込んだことがひびいて、対前年比40.8%減と大巾に減少し、従って輸出総額に占める割合も前年の23.7%から16.7%へと大きく後退し、重要外貨源としての地位がゆらいできている。

② 生産性

表3 単位面積当り生産性

年 度	栽 培 面 積 ha	さとうきび収量 (A) t/ha	分蜜糖収量 (B) t/ha	歩 留 り B/A
65/66	310.327	42.8	4.52	10.6
70/71	473.295	49.2	4.35	8.8
73/74	468.263	55.7	5.22	9.4
74/75	513.552	52.2	4.66	8.9
75/76	553.153	55.9	5.20	9.3

APO提供 フィリピン砂糖協会資料より

前に見た生産の伸びは表3に見られる如く、主として栽培面積の増加によるもので、過去10年間にその伸びは78.1%に及んでいる。しかし1ha当りの収量は多収穫品種の普及によって伸びているものの、55.9tと低い状態である。また製糖歩当りも平均9.4%程度と低い状態であるが、これらの原因としては次のようなことが考えられる。

イ) 灌漑面積率が65/66年度の5.0%から75/76年度に9.0%と努力はしているもの

ば 63,800 ペソ、50 ha でも 31,600 ペソの純利益という計算になる。

ところが 76/77 年度の政府買入価格はピクル当り 81 ペソなので、生産費が前年と変わらないものとしてもピクル当り 10 ペソの欠損を出し、これで 75/76 年の利益とは相殺されてしまうので、農場主の不満は大変に強いものがあつた。尚、77/78 年度には肥料価格が下げられるということなので幾分か好転するのではないかと考えられる。

5. 今後の課題

フィリピン糖業の今日あるのは、米国の力に負うところが大きい。しかしその反面、国際価格より高い価格で、しかも特惠待遇による長期安定的な米国への輸出という特権に安住し合理化を怠って来たことも否定できない。

1973 年以後米国以外への輸出も僅か乍ら行なわれて来たが、一層安定的な新市場を開発することが目下の一方での急務であり 他方限界地の作付転換、小規模経営のブロック化による規模拡大、営農指導の充実、優良品種の開発、道路・橋・灌排水設備の整備・農場用機械及び運搬具の整備充実、工場再配置と近代化、倉庫設備の拡充等の対策は考えられているものの、いずれも巨大な資本投下や、すぐれた指導性を必要とするので、一朝一夕には解決できない問題であるが故に、政府による一貫した政策の確立も急務であろう。何故ならば特に政府内部に生産規模拡大派と生産性向上派の政策的対立があるとも言われ、昨年 5 月に行なわれた機構統合の混乱と相まって、生産者に不安が強まっている現状は、収益の不安定性・政府管理価格に対する不満とともに、生産者の生産意欲を益々減退させる以外の何ものでもないといわざるを得ないからである。

註1) E. Artshwager and E. W. Brandes, "Sugarcane", Washington, D. C.

1958, p 23。

(2) フィリピンでは、搬入された「きび」からとれた分蜜糖を販売して収入となる。その際農園主と製糖業者の間で分蜜糖の取得分を定める。これが分配率といわれ、製糖地域や年度によって異なるが、概ね 60 対 40 ~ 65 対 35 の範囲が多く、平均すると 63 対 37 になっている。

(3) 1 ピクルはフィリピンでは 63.25 kg である。

(4) 註(2)の平均分配率 63 で計算した。

(5) 76/77 年度の買入価格は輸出用が 90 ペソ、国内用 60 ペソであり、分蜜糖収量の 70 % が輸出用に、30 % が国内用に割当てられたので、加重平均して単価を算出した。

参考文献と資料

- (1) Carlos Quirino, "History of the Philippine Sugar Industry",
Manila, 1974。
- (2) A. A. Bargos, "Sugarcane productivity and cost of production
survey results, Western Visayas, CY1974-75", Jul., 1976。
- (3) PHILSUGIN, "Sugarcane production in the Philippines"; Quezon,
Apr. , 1977。
(The Asian Productivity Organization より提供されたもの)
- (4) PHILSUGIN, "Philippine Sugar Institute Silver Jubilee Papers",
Aug. , 1976。